枕草子の一性格

―男性の服色をとおして―

伊原　昭

（一）

現代の文学とも同様といえるが、さまざまな人物の織りなす人間模様が、王朝の、物語はもとより日記・随筆にも描かれ、そこに登場する人物が諸作品の主体をなし、大きな役割をはたしているといってよい。

そして、「着給へる物どもをさへ、いひたつるも、物いひさがなきやうなれど、むかし物語にも、人の御装束をこそは、まづいひためれ」（宋摘花　一―二五七頁）と源氏物語にあるように、装束、つまり衣裳が主要なものとなっている。さらに、それは、藝・晴、四季折々の多様な服色が中心となって描かれることが多い。

王朝文芸が華麗優雅な美を創造し得ているのは、一つには、この克明な描写によるともいえるようである。

当時の作品[注1]を見ると、男性も服色にはなかなか関心が深く、位階・役柄によって着用するものをはじめとして、多彩な衣裳を装って登場することも少なくない。しかし、それは、何といっても女性のためのものといってよく、用例数[注2]の上からもそのようにいえるようである。

（二）

こうした中で、枕草子は、史実に基づく回想の段はもとより、他の章段でも、かえって男性の服色描写が目立っている。

着用している服色が描写されているのは、女性[注3]は、定子皇后（七例）淑景舎（一例）姫君（一例）上（貴子）（三例）中納言の君（一例）ふせ（采女）（一例）作者（二例）、その他、女房・尼など（一八例）であり、皇后を除けば、その描写は割合簡略である。

男性[注4]は、主上（一例）道隆（三例）伊周（三例）僧都の君（隆円）（一例）松君（道雅）（一例）山の井の大納言（道頼）（一例）、その他の君達（二例）。藤原斉信（一例）斉信の馬副（一例）藤原宣孝（一例）隆光（一例）上達部・殿上人（六例）蔵人（七例）衛府（一例）靱負の佐（一例）衛門尉（一例）所の衆（一例）小舎人童（一例）牛飼童（一例）陪従（一例）男（四例）下衆（一例）僧（三例）、その他（八例）で、五二例に及び、女性の三四例よりはるかに多い。なお、男性の衣裳は、「指貫は」（二八一段三〇一頁）「狩衣は」（二八二段三〇一頁）「單は」（二八三段三〇一頁）「下襲は」（二八四段三〇二頁）

枕草子の一性格　―男性の服色をとおして―

として、色目だけで段が成っている。なお、女性も同様、「女の表着は」（一本六段三二四頁）「唐衣は」（一本七段三二四頁）「裳は」（一本八段三二四頁）「汗衫は」（一本九段三二四頁）とやはり色目だけで記されているが、「一本」の中に記載されている。

枕草子の男性の服色描写は、用例数の上からも、源氏・宇津保の長篇物語につぎ、栄花物語よりも多く、王朝作品で最多の部類に属する。[注5] さらに、これらの作品では、女性のそれがはるかに多いことを考えると、枕草子の男性の優位が一層きわ立つといってよい。[注6]

このことは、特に、紫式部日記が、道長をはじめ、その一門の君達、宮の大夫藤原斉信その他の上達部・殿上人、御産祈禱のための高僧達五〇名をこえる男性が、夜昼、土御門殿に祇候し、作者のごく身近に接する様子を記しながら、服色については、「宮のしもべ」の御湯殿の儀の際のきわめて簡単な描写一例（四五六頁）にすぎず、これに対して、女性の方は、作者自身をも含めて五〇用例にも及んでおり、紫式部の、清少納言とは対蹠的な面をのぞかせている。

このように、枕草子は、他の諸作品とことなり、男性が衣裳の色合によって詳しく描かれることがはなはだ多いのである。

（三）

もともと枕草子は、岸上博士のお説[注7]に據って計算してみると、史実文の中では、女性約四〇名、男性五七名程で、二回以上あらわれる人の出現回数を集計すると、男約八五回、女約五二回であり、これは史実の部分だけでなく、全体をとおして、同様の比率のようで、男性が女性より多い。

清少納言が宮仕していた十年程の間は、[注8] 岸上博士が「斯くのごとく枕草子の史実の文の中にあらはれてくる人々が多数であることは、彼女の宮仕生活が如何に華々しかったかと云ふことを如実に示すものであり」[注9]といわれているように、多くの人々と接したようであるし、清少納言のいう宮仕というものは、「かけまくもかしこき御前をはじめ奉りて、上達部・殿上人、五位・四位はさらにもいはず、見ぬ人はすくなくこそあらめ。女房の従者、その里より来る者、長女・御厠人の従者、たびしかはらといふまで、いつかはそれをはぢかくれたりし。」（二四段六三・四頁）とのべているように、見ぬ人はすくなくこそあらめという程多数の男性に接する機会を持つものであったようである。

そして、清少納言は、「おほかた見つけでは、しばしもえこそ慰むまじけれ。」（一四三段二〇一頁）「なほ、此の宮の人には、さべきなめり。」（二九九段三二一頁）とあるように、定子皇后にとって、また、その後宮にとって、いわば、なくてはならぬ女房であったようである。例えば、他の女房達が次第々々に退ってやすんでしまって誰もいなくなっても、ただ一人でお仕えしている、といった場合（三二三段三一八頁）も、「例の」とあり、しばしばのことであったらしい。

定子後宮は、「職の御曹司におはします頃、……夜も昼も、殿上人の絶ゆるをりなし。上達部までまゐり給ふに、おぼろげに、いそぐことなきは、かならずまゐり給ふ。」（七八段一一三頁）のように、殿上人はもとより、上達部までもひっきりなしに参上したという。

こうした定子のもとで、作者は男性への応対に積極的であった。紫式部日記に、式部が男性から身をかくすことばかり考え、会うこ

とをいとわしく煩わしく思っていたのは対蹠的で興味がある。「職の御曹司におはします頃、……さて、その山作りたる日、御使に式部丞忠隆まゐりたれば、褥さしいだしてものなどいふに、」（八七段一三〇頁）のように、天皇の御使が参上した場合（一〇三段一五七頁）、さらに東宮の御使（一〇四段一六三頁）、また雷見舞の上達部（九九段一五三頁）の応接など、公的な場を始め、あの人この人の応対をすることに夢中になるような折もあったようである。

定子も、呉竹を、「おい、この君にこそ」と言った有名な段（一三七段一九一頁）でも、「出でて見よ。」と殿上人達への応接をお命じになっているようで、多数の公卿・殿上人の日毎の出入多い定子のもとで、その接渉をまかされる場合も少なくなかったようである。そして、定子は、「誰かことをも、殿上人ほめけりなどきこしめすを、さいはるる人をも、よろこばせ給ふもをかし。」（一三七段一九二・三頁）のような方であった、と記して、作者自身の行為を思召しにかなう、と肯定していたようである。というより、自分がそうであったので、こうした定子のお気持を書き留めたのであろう。

一方、男性側も、清少納言を必要とし、接することを望み、定子へ啓することなどの取次を依頼することも少なくなかったようである。例えば、藤原行成（四九段九五・六頁）、また右中将源経房（一四三段一九九頁）をはじめ、殿上人達も同様で、清少納言が里に下っている時も、昼夜来て、ついに、「あまりうるさくもあれば」と閉口する程で、とうとう居所を経房・済政などにだけ知らせて一般の人達にはだまって他へ移ってしまう程であった。妹・兄といった仲だった橘則光を斉信が責めて、居所を知ろうとするのをはぐらかして、一夜諸処を引きまわした有様などをも、則光との会話に描いている（八四段一二三・四頁）。栄花物語に、「清少納言など出であひて、少〳〵の若き人などにも勝りておかしう誇りかなるけはひを、猶捨て難くおぼえて、二三人づゝつれてぞ常に参る。」（巻七とりべ野　上二一三・四頁）とあり、定子は、すでに非運の嘆きに沈んでおられた時であるが、清少納言は、やはり彼女らしく「おかしう誇りかなるけはひ」であり、君達をひきつけ、彼等は始終二三人連れ立っては参上していたようである。

なお、藤原公任達の問に対しての漢籍をふまえながらの当意即妙の応答のため、俊賢・左兵衛督達が清少納言の身分を上げて掌侍にしていただくよう奏上しようと決めた、といったことを記したり（一〇六段一六五・六頁）、また、行成が作者に対して、戯書であるが、「別当少納言殿」と書いてよこしたことを記している（一三三段一八五頁）。「別当」は、検非違使庁・蔵人所の長官、また内膳別当、あるいは特定の寺院の上首を称したりするようであるが、御匣殿別当の他は、男性の官職名であり、「少納言」は太政官の三等相当官である。諧謔であるにしろ、行成も、清女を男性に伍して働き得る人、男性なみの人として考えていたのであろう。

このような、男性とのかかわりは、作者の役柄のためかと考えられる程であるが、岸上博士は、「……彼女は皇后に仕へるに当って、実用的な事務的な女房として上ったのではなく、皇后の御生活を豊かにし、賑はす役目を帯びたものであったやうに考へられる。」[法10]と述べられ、このお説に従えば、清少納言の男性への関心の強さ、積極的な接渉などは、自発的ともいうべきものであったのであろう。

後宮を中心に、公卿・殿上人をはじめとする廷臣達、あるいはそれ以外の男性にも活発に接し、男の側もその外交手腕によって彼女にひきつけられたようである。

特に、清女はこれら男性に対して、容姿に強い興味を抱いていたようで、そこに彼女の生きがいの一つがあったかもしれないとさえ思われる。

清少納言は、これら男性の心情などの内面をじっと時間をかけて客観的によく洞察し、それに容姿や行為も加えて人間としての全貌をつかんで形象する、というよりは、むしろ、作者の鋭敏な感覚―特に視覚―で、パッと外面的な部分を捉え、それを絵画的に表現しようとしているようである。それは、人との応答でも、頭にひらめいたことを即刻答えることを誇りとしているように。

いわば、作者の目のつけどころは、「小白河といふ所は、小一條の大将殿の御家ぞかし。そこにて上達部、結縁の八講し給ふ。……左右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の指貫、直衣、浅葱の帷子どもぞすかし給へる。すこしおとなび給へるは、青鈍の指貫、しろき袴もいとすずしげなり。……をかしき見物(みもの)なり。……そのつぎには、殿上人・若君達、狩装束・直衣などもいとをかしうて、えゐもさだまらず、ここかしこにたちさまよひたるもいとをかし。……すこし日たくるほどに、三位の中将とは関白殿をぞきこえし、かうのうすものの二藍の御直衣、二藍の織物の指貫、濃蘇枋のしたの御袴に、はりたるしろきひとへのいみじうあざやかなるを着給ひて、あゆみ入り給へる、さばかりかろびすずしげなる御中に、あつかはしげなるべけれど、いといみじうめでたしとぞ見え給ふ。」(三五段七七頁)のように、男性のさまざまな色合の衣裳を装って参集する容姿の美を捉えることであり、それを「見物なり」[注11]と観賞することでもあったようである。

(四)

このような男性への作者の態度は、女性とは同じ場で朝夕起居をともにし、特に、行事・儀式などでは衣裳の妍をきそったであろうのに、女房一人々々の服色にはそれ程関心を示すこともなく、以下の諸例にもみられるように、男性のそれへとむけられていったのである。

一條天皇の、

①桜の直衣に、くれなゐの御衣の夕ばえなども、かしこければとどめつ。(一〇四段一六四頁)

道隆の、

②三位の中将とは関白殿をぞきこえし、かうのうすものの二藍の御直衣、二藍の織物の指貫、濃蘇枋のしたの御袴に、はりたるしろきひとへのいみじうあざやかなるを着給ひて、(三五段七七頁)

をはじめ、③「薄色の御直衣、萌黄の織物の指貫、紅の御衣」(一〇四段一六一頁)④「青鈍の固紋の御指貫、桜の御直衣にくれなゐの御衣三つばかりを、」(二七八段二八五頁)。

伊周の、

⑤桜の直衣のすこしなよらかなるに、こきむらさきの固紋の指貫、しろき御衣ども、うへにはこき綾のいとあざやかなるをいだしてまゐり給へるに、」(二三段五八・五九頁)

これは青い瓶に桜の五尺ばかりの枝を多くさしたのを背景にしている。また、⑥「御直衣、指貫の紫の色、雪にはえていみじうをかし。」（一八四段二三二頁）⑦「月のいみじうあかく、御直衣のいと白う見ゆるに、……またいみじうめでたし。」（二二三段三一九頁）。

隆円僧都の、

⑧赤色の薄物の御衣、むらさきの御袈裟、いと薄き薄色の御衣ども、指貫など着給ひて、……いとをかし。」（二七八段二九九頁）。

道雅の、

⑨葡萄染の織物の直衣、濃き綾の打ちたる、紅梅の織物など着給へり。……泣きののしり給ふさへ、いとはえばえし。（二七八段二九九頁）。

道頼の、

⑩山の井の大納言、その御次々のさならぬ人々、くろきものひき散らしたるやうに、（二二九段一八三頁）。

など。

「目はそらにて、ただおはしますをのみ見たてまつれば、ほとどつぎめをはなちつべし。」（二三段六〇頁）のように、夢中になってただお見あげ申し上げるだけという程の一條天皇をはじめ、中関白家の主な人々は、いずれも作者の筆によって、さまざまな色合の衣裳を着用し、登場している。

定子皇后が、「ひさしうやありつる。それは大夫の、院の御供に着て人に見えぬる、おなじ下襲ながらあらば、人わろしと思ひなんとて、こと下襲縫はせ給ひけるほどに、おそきなりけり。いとすき給へりな」（二七八段二九六頁）と語られた程の衣裳に凝った道長が、紫式部日記では最も主要な人物であるにかかわらず、まったく衣裳の色合にふれられていないのはまことに対蹠的というべきであろう。

枕草子では、さらに他の男性にも及び、

⑪右衛門の佐宣孝といひける人は、「あぢきなきことなり。ただきよき衣を着てまうでんに、なでふことかあらん。よも、あやしうてまうでよと、御嶽さらにのたまはじ」とて、三月、むらさきのいと濃き指貫、しろき襖、山吹のいみじうおどろおどろしきなど着て、隆光が主殿の助には、青色の襖、くれなゐの衣、すりもどろかしたる水干といふ袴を着せて、うちつづきまうでたりけるを、（二一九段一七二頁）。

のような紫式部の夫となった藤原宣孝・隆光父子の描写も見られる。また、桜を大きな瓶にさした場面での君達の、⑫「桜の直衣に出袿」（四段四六頁）や、四月祭の頃の、上達部・殿上人の、⑬「うへのきぬのこきうすきばかりのけぢめにて、白襲どもおなじさまに、すずしげにをかし。」（五段四七頁）、六月十よ日の猛暑の折の、上達部の、⑭「二藍の指貫、直衣、浅葱の帷子どもぞすかし給へる。すこしおとなび給へるは、青鈍の指貫、しろき袴もいとすずしげなり。」（三五段七七頁）。また、朝帰りの人の、⑮「二藍の指貫、……香染の狩衣、白き生絹にくれなる……」（三六段八二頁）、細殿の局の簾から半身中へ入れたような人の、⑯「指貫いと濃う、直衣あざやかにて、色々の衣ども こぼし出でたる……」（七六段一一一頁）、正月参籠の人々しき人の、⑰「青鈍の指貫、……しろき衣」（一二一段一七六頁）、同じく花ざかりの頃の参籠の主と見える二三人の、⑱「桜の襖、柳など」（一二一段一七七頁）、その場での小舎人童どもの、「紅梅、萌黄の狩衣、いろいろの衣、おしすりもどろかしたる袴」（同前）、すきずきしく

てひとり住みする人の、⑲「しろき衣どものうへに、山吹・紅などぞ着たる。しろき單のいたうしぼみたるを」（一九一段一三八頁）、祭の前日の君達の、⑳「二藍のおなじ指貫、あるは狩衣など」（二三三段二五四頁）、雪景色の中の、五位四位の人々の、㉑「うへのきぬの色いときよらにて、……むらさきの指貫も、雪に冴え映えて濃さまさりたるを着て、袙のくれなるならずは、おどろおどろしき山吹をいだして、」（二四七段二六九頁）、雪がやんで、奥まで月光がさしこんでいる車中の人々の、㉒「葡萄染の固紋の指貫、白き衣、山吹・くれなる、……直衣のいと白き」（三〇二段三一三頁）など、公・私の場における身分ある男性が服色で捉えられ描かれている。

また、蔵人のような常々宮廷で立働く人々の例も少なくない。㉓「六位の蔵人。いみじき君達なれど、えしも着給はぬ綾織物を、心にまかせて着たる、青色姿などめでたきなり。」（八八段一三六頁）や、㉔「蔵人になれる婿の、れうの表の袴、黒半臂などいみじうあざやかにて」（二六六段二七五頁）をはじめ、六位の蔵人の、㉕「青色」また「緑衫」（五段四七頁　七六段一一一頁　二〇一段二四六頁　二九三段三〇七頁）、その宿直姿の、㉖「むらさき」（八八段一三八頁）、行事の際の、㉗「掻練襲」（九二段一四二頁）、五位の蔵人の、㉘「薄二藍、青鈍の指貫」（三三段七四頁）など。その他、侍の長なる者の、㉙「柚の葉のごとくなる宿直姿」（八七段一三一頁）、牛飼童の、㉚「末濃だちたる袴、二藍、……掻練・山吹など」（二〇三段二四七頁）、賀茂の臨時の祭の舞人・楽人・陪従達の、㉛「青摺、……地摺の袴、……柳」（二二〇段二五一・二頁）、祭のかへさの下衆・所の衆の、㉜「青朽葉」「青色に白襲」（二二二段二五四頁）、白馬の日の靱負の佐の、㉝「摺衣やうする」（二九五段三〇九頁）、左右の衛門の尉の、㉞「布の白袴、……青色」（三二三段三一八頁）のような、侍の長、牛飼童、舞人、楽人、所の衆、靱負の佐、左右衛門の尉といった、位階の低い人達をも、場面によっては服色で描いている。

さらに、㉟「五月四日の夕つかた、青き草おほくいとうるはしく切りて、左右になひて、赤衣着たる男の行くこそをかしけれ。」（二二五段二五六頁）のような「赤衣」（二二二段二五三頁　二七七段二八三頁）や、㊱「いとくろき衣」（一一九段一七二頁）、㊲「黒袴」（一四四段二〇四頁）のような召使あるいは一般の男、また、世を捨てた僧侶までも衣裳の色目で捉えている。㊳「季の御讀經の威儀師。赤袈裟着て僧の名どもよみあげたる、いときらきらし。」（一五六段二〇九頁）や、㊴「四十ばかりの僧のいときよげなる、墨染の衣、薄物の袈裟、あざやかに装束きて、」（一本二三段三二六頁）、㊵「……白衣着たる法師、蓑虫などのやうなる者ども集りて、」（一本二八段三二九頁）のように。

帝を始め、常時接する中関白家の君達、内・後宮へ祇候して作者に多く接する公卿・殿上人、あるいは蔵人などの廷臣は言うまでもないであろうが、位階の低い者、それ程接することもないような人々、さては、出家まで、作者はその容姿、特に衣裳、さらにその服色に焦点をあてて描き出しているのが多く、種々の男性をこれ程視覚的に捉え描写している作品はないと言ってよい。

そして、この面での観察は、微に入り、その描写は細に入っている。

かへる年の二月廿日よ日、……梅壷の東面、半蔀あげて、「こゝに」といへば、めでたくてぞあゆみ出で給へる。桜の直衣のい

みじくはなばなと、裏のつやなど、えもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織りみだりて、くれなゐの色、打ち目など、かがやくばかりぞ見ゆる。しろき、薄色など、下にあまたかさなり、せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとちかうよりゐ給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはとぞ見えたる。（八三段一二〇頁）

絵に画いたり、物語が素晴らしいと言うような、それこそ現実にはいないような人、それがまさしく実在する、それがこのような姿なのだと作者が最高の讃辞を呈しているのは、頭の中将藤原斉信である。直衣の華やかな桜がさね[注12]、その裏の色つやの何とも言われぬ清らかな美しさ、濃い葡萄染[注13]の指貫、それには紫の藤の折枝が仰山に散し織られ、そこから光沢が輝く程の袿の紅の色合が見える。下には白や薄色[注14]の下着が何枚もかさなっている。そうした衣裳の斉信を、さらに、「御前の梅は、西はしろく、東は紅梅にて、すこし落ちがたになりたれど、なほをかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。」（八三段一二〇頁）という、春の日に映ずる白梅・紅梅の繚乱とした色どりの自然の中に登場させている。

簾外の、このような人物の華麗優艶さは、一転して、簾内の作者の醜さを対照させることで、一層その美しさを際立たせようとしている。「御簾の内に、まいてわかやかなる女房などの、髪うるはしう、こぼれかかりて、などいひためるやうにて、もののいらへなどしたらんは、いますこしをかしう、見所ありぬべきに、いとさだ過ぎ、ふるぶるしき人の、髪などもわがにはあらねばにや、所々わななきちりぼひて、おほかた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬうは衣などばかり、あまたあれど、つゆのはえも見えぬに、おはしまさねば裳も着ず、袿すがたにてゐたるこそ、物ぞこなひにてくちをしけれ。」（八三段一二〇・一頁）服喪中で色の有無もわからぬような薄鈍[注15]、色合もわからない表着などばかりかさねているが、少しも見栄もしない上に、定子御不在ということで裳もつけない袿姿、「外より見えんは」「奥の方より見いだされたらんうしろこそ」と、簾を境にしての、美醜相反する、内からも外からも予想外の人物像を服色中心に描き分けている。この後、定子のもとに出仕したところ、「このことどもよりは、昼、斉信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそおぼえつれ」（八三段一二二頁）と仰せられた。それで、「まづそのことをこそは啓せんと思ひてまゐりつるに、物語のことにまぎれて」とお答えする。そして、「ありつる事のさま、語り聞えさすれば、」と、梅壺での先の斉信の有様を申し上げる。すると、女房達は、「誰も見つれど、いとかう、縫ひたる糸、針目までやは見とほしつる」（八四段一二二頁）と笑った、とある。

斉信礼讃を女房達のたとえのような微に入り細に入りの観察で、服色に焦点をあてて前掲の例のようにのべており、作者の男性への強烈な関心事は服色を中心とした容姿の絵画的美であった、とも言えるようである。

（五）

作者が「まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、こ

れにこそはとぞ見えたる。」という程絶讃したことを思えば、斉信に、作者の理想の男性像の美が結晶されていると考えられ、その衣裳にこそ、作者にとっての無上の美をうみ出す典型を見ることができると言い得るであろう。

まず、服色自体が、桜、葡萄染、紅と、いずれもまことに派手なはなやかな色調であり、それに下に薄色や白がかさねられている。そればかりでなく、それらが、「いみじく」という程の「はなばな」とした桜であり、「いと」という程の「濃き」葡萄染であり、さらにそれには「おどろおどろしく」という程仰山な藤の折枝の模様が織り出されている。紅はまた、砧で打った光沢が「かがやくばかり」の艶のあるものなのである。服色自体は言うに及ばず、斉信のはそれらが「はなばな」「おどろおどろし」「かがやくばかり」といった、まばゆいばかりの驚くような華麗なもので、その度合がまた「いみじく」「いと」「えもいはず」という最大級のそれなのである。実にあざやかで目もさめるばかりの色合の衣裳といってよい。うすくほのかな色合で、それぞれの色が渾然と一つに融合しあう、というのとは反対に、はでやかである上に、それぞれの色相が濃く克明ではっきりしており、互にきそいあうことで色彩同志が生きてくる、とでも言えるような衣裳の色なのである。

このような傾向は、斉信ばかりでなく、これまであげた多くの男性達の服色にも見られ、赤（一例）赤衣（三例）搔練襲（二例）紅（七例）蘇枋（一例）濃き（三例）紅梅（二例）桜（五例）山吹（五例）萌黄（二例）葡萄染（二例）二藍（七例）紫（五例）薄色（二例）などの、赤、黄、緑、紫などの系統の明るくはなやかな服色が大多数を占めている。そして、もっと端的に斉信のような傾向の知られる、色合に対しての「濃き」、さらにその度合を示す「いと」「いみじう」、特に、美の、「あざやか」「はえる」「おどろおどろし」などを伴なっての表現が多い。これは、枕草子独特とも言えるもので、いかに作者が男性の服色の華麗さ鮮明な美に魅せられ心ひかれたかをうかがい知ることができるようである。前掲の引用例をみても、（番号はそれを示す）②道隆の「濃」蘇枋のしたの袴「いみじう」「あざやか」なしろいひとへ。⑤伊周の「こき」むらさきの指貫、「あざやかなる」「こき」綾、⑥同じく伊周の雪の白さに「はえ」る指貫の紫、⑦同じく伊周の月光によって「いと」白く見える直衣。⑨道雅の「濃き」綾。⑪宣孝の「いと」「濃き」指貫のむらさき、「いみじう」「おどろおどろしき」山吹。⑯「いと」「濃き」（紫）の指貫、「あざやか」な直衣。㉑雪に「冴え」「映えて」「濃さまさりたる」紫の指貫、「おどろおどろしき」山吹。㉒「いと」白き直衣。㉔「いみじう」「あざやか」な黒半臂。㊱「いと」くろき衣。㊳「きらきらし」い感じのする赤袈裟。㊴「あざやか」に装った墨染の衣。などが見えている。

男性の服色描写の中で、このような例は、源氏物語にも「いと」などはなく、「濃き」はそれに代る「深き」[注17]が一例、その他四例[注16]にすぎず、王朝の諸作品全体でも一〇例にみたない。つまり、清少納言の、こうした表現による服色への嗜好は特異なものであったようである。

彼女は、衣裳のみならず、例えば、「空いみじうくろきに」（一〇六段一六五頁）のような自然も、「橘の葉のこくあをきに、花のいと

しろう咲きたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花のなかよりこがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、」（三七段八三頁）のような植物でも、「猫は上のかぎりくろくて、腹いとしろき。」（五二段九九頁）のような動物も、「くれなゐの御衣どもの、いふも世のつねなる袿、……いとくろうつややかなる琵琶に、……御額の程の、いみじうしろうめでたくけざやかにて、はづれさせ給へるは、たとふべきかたぞなきや。」（九四段一四四・五頁）のような容貌も、同様であり、終には、「ただの紙のいと白うきよげなるに、よき筆、白き色紙、みちのくに紙など得つれば、こよなうなぐさみて、……また、高麗縁の、筵青うこまやかに厚きが、縁の紋いとあざやかに、黒う白う見えたるをひきひろげたれば、なにか、なほこの世は、さらにさらにえ思ひ捨つまじと、命さへ惜しくなんなる……」（二七七段二八二頁）のように、「いと」白い紙や、筵の縁の黒と白の紋の「いと」「あざやか」なのを見ると、片時も生きていられそうにもなくどこへでも行ってしまいたいと思う程の時も、この上もなく気持がなぐさめられて、やはり、もう暫く生きていたいと思ったり、また、この世がまったく思い捨てられそうにもないと思って、命まで惜しくなったりする、とさえ極言しているのである。

清少納言のこうした特異な傾向は、服色はもとより全般にわたるものであることが知られ、彼女の本質的なものであったとさえ考えられるのである。

男性の衣裳の、視覚を強く刺戟するであろう濃度の濃いはっきりと目に映ずる色相、派手ではなやかな性格の色調、また、色相互の非常にあざやかな、互に映発しあうようなかかわり、それらが多く、「いと」「いみじく」とさらに強調されており、さながら作者の赤裸々なナマのままの感覚からの所産ということができそうである。

清少納言は、自身にとって最も関心の強い男性をこのように捉えた。装束のほのかな色合、それらが穏やかに渾然と調和しあい、その色調から醸し出されてくる雰囲気をも含めての人物の総合的な像の形象というよりは、彼女の感覚―特に視覚―に強く訴える最も刺戟的な色彩に目をうばわれ、衣裳もそうした色目に心を引かれ、人物もそれを中心とした容姿で把握し描き上げようとした。いわば、きわめて鮮明な、きわめて華やかな色調にかざられた人間の、外面を彼女の鋭敏な感覚で即時的に捉え絵画的に描くことで人間像の形象を終っていることが少なくないのである。人物の内面まで時間をかけて探り、質的な面まで追求していくことは彼女の性格にあわなかったようである。

（六）

清少納言は、現象の本質に深くくいこんでゆき、冷徹な眼で洞察してゆく、というのではなく、彼女の本質でもあり、また磨かれたものでもある素晴らしく繊細鋭敏な高度の感覚を存分に働かせて、直感的に捉えた現象を自在に表現したといってよいのではないかと思われる。

一つの主題を長く時間をかけて追い続け物語ってゆく、いわば物語文学でもない。自己の内面に深くメスを入れてみずからの本質的

なものを解剖してゆくような自照的な日記文学でもない。

枕草子のような、文学史上特筆すべき独自のジャンルを創造した根底に、作者が最も心ひかれた男性というものを服色に焦点をあてて形象したこれまで述べてきたような特異な態度が、かかわりをもっていたと言えるのではないかと考えるのである。

（55・9・28）

注

1、竹取物語、伊勢物語、大和物語、篁物語、平中物語、多武峯少将物語、落窪物語、宇津保物語、源氏物語、浜松中納言物語、狭衣物語、夜の寝覚、堤中納言物語、土左日記、かげろふ日記、和泉式部日記、紫式部日記、更級日記、枕草子、栄花物語。

2、枕草子を除いて、注1の諸作品における総計は、男性二〇二例、女性四七一例となる。（用例数は個人々々を別に数え、一人でも場が異なるごとに回数を加えた）

3、定子皇后（九四段一四四頁　一〇四段一六〇頁　一六一頁　一八四段二三一頁　二七八段二八五頁　二八六頁　二九六頁）淑景舎（一〇四段一六一頁）姫君（二七八段二八七頁）　上（貴子）（一〇四段一六〇頁　二七八段二九四頁）　作者（八三段一二一頁　二七八段二九八頁）。あと女房・采女・尼など（二三段五九頁　三五段七九頁　三六段八一頁　八七段一二八頁　九〇段一三九頁　一〇四段一六一頁　一六一頁　一一九段一七二頁　一四三段一九九頁　一六一段二一四頁　一九〇段二三七頁　一九三段二四〇頁　二〇〇段二四三頁　二七八段二八五頁　二九四頁　二九四頁　三〇二段三一三頁　一本二三段三二七頁）

4、主上（一〇四段一六四頁）道隆（三五段七七頁　一〇四段一六一頁　二七一段二八五頁）伊周（二三段五八・九頁　一八四段二三一頁　三一三頁　三一九頁）僧都の君（隆円）（二七八段二九九頁）松君（道雅）（二七八段二九九頁）山の井の大納言（道頼）（一二九段一八三頁）その他の君達（四段四六頁　二二二段二五四頁）藤原斉信（八三段一二〇頁）斉信の馬副（一二八段一八二頁）藤原宣孝（一一九段一七一頁）隆光（一一九段一七一頁）上達部・殿上人（五段四七頁　三五段七七頁　七七頁　七六段一一頁　一二九段一八三頁　二四七段二六九頁）蔵人（七六段一一一頁　八八段一三六頁　一三八頁　九二段一四二頁　二〇一段二四六頁　二六六段二七五頁　二九二段三〇七頁）衛府（二九二段三〇七頁）　衛門尉（三一二段三一八頁）　所の衆（二二二段二五四頁）小舎人童（一二〇段一七七頁）牛飼童（二〇三段一四七頁）陪従（二二〇段二五二頁）男（一一九段一七二頁　一四四段二〇四頁　二二五段二五六頁　二七七段二八三頁）下衆（二二二段二五四頁）僧（一五六段二〇九頁　一本二三段三二八頁　一本二八段三二九頁）その他（三三段七四頁　三六段八二頁　八七段一三一頁　一二〇段一七六頁　一二〇段一七七頁　一九一段二三八頁　二二〇段二五一頁　三〇二段三一三頁）

5、源氏物語六四例、宇津保物語五六例、栄花物語四四例。

6、源氏物語九三例、宇津保物語七六例、栄花物語一六五例。

7、岸上慎二「清少納言傳記攷」（新生社　昭和33年3月）三〇二～三二一頁

8、「鶯は、……九重のうちになかぬぞいとわろき。……十年ばかりさぶらひてききしに」（四一段九〇頁）とあって、いろいろ問題はあるようであるが、ほぼそれくらいの間の宮仕えであったようである。

9、注7と同書　三三〇頁

10、注7と同書　三〇一頁

11、源氏物語にも「あやしく、心ゆく見物にぞありける」（初音　二―三九〇頁）などの例が見られないわけではないが。

12、表白、裏紅花或いは葡萄。桜の花の色を模したかさねの色目。

13、染色は赤味の多い紫色。織色は経糸紅又は赤、緯糸淡紫。かさねは表蘇芳裏縹。

14、何色にも言うが、平安時代は主としてうす紫をさす。織色は経糸紫、緯糸白。かさねは表裏とも淡紫。

15、墨染のうすい色で、ねずみ色。墨に青花をさして染めたものという。喪服の色。注12より15の服色は、小著「日本文学色彩用語集成―中古―」（笠間書院　昭和52年4月）の「色彩用語解説」に詳しい。

16、「おどろ〳〵しき赤衣姿」（二―一一九頁）「赤色を……一つものとかがやきて」（二―三一七頁）「白き御衣の、……文、けざやかに」（三―一九四頁）「くれなゐ深き袙の袂」（三―三三一頁）「御衣のくれなゐなるに、御直衣の花の、おどろ〳〵しく移りたるを」（五―一九三頁）

17、「いと黒き」（更級五三二頁）「濃き綾の袿」（宇津保三―一六二頁）「いと濃き紅の御袴」（落窪一七〇頁）「色いと濃き唐撫子の浮線綾の御指貫、余りおどろ〳〵しき御あはひを着給へるも」（狭衣　四二頁）「濃き御衣などの上に」（栄花　上一〇七頁）「濃紫の固紋の指貫着て」（栄花　上三一〇頁）「あるは紫の織ものゝ指貫どもを、濃紫に薄紫にて、」（栄花　下五一頁）「いろ〳〵のおどろ〳〵しういみじき唐錦どもを著て」（栄花　下一五一頁）「赤き袍衣にこと〳〵しくて参りたる」（栄花　下四九九頁）

枕草子、紫式部日記、源氏物語、栄花物語その他、いずれも日本古典文学大系本に據る。（宇津保物語は日本古典全書本）

引用例中の、――　、、、等の傍のしるしは稿者の加えたものである。